

令和 7 年度小笠原諸島希少鳥類保護管理対策調査

オガサワラカワラヒワ生息状況報告(速報)

2026 年 2 月 25 日

関東森林管理局小笠原諸島森林生態系保全センター

一般社団法人 Islands care

1. 報告事項**1-1. カメラ調査****(1) 調査方法****1) 調査期間(カメラ点検実施)**

2025 年 5 月、7 月、11 月に実施した。

2) 調査場所

- ・ 各島のカメラ設置箇所については図 1-1-1、設置状況は写真 1-1-1 に示す。
- ・ 向島、姉島、妹島、姪島の天然水場に自動撮影カメラ（以下、「カメラ」という。）を各 4 台設置。
- ・ 平島は小型人工水場を 4 基設置し、各水場にカメラを設置した。
- ・ 全島に大型人工水場を 2～3 基設置し、各水場にカメラ（平島、姪島、向島は SIM カメラを含む。）を設置した。

3) カメラの設定

- ・ 稼働時間は 5 時～18 時（2024 年度から変更、以前は 24 時間稼働）とした。
- ・ ただし、ネズミが低密度化した平島、向島、姪島では、ネズミの監視のため 24 時間稼働とした。

4) 分析方法

- ・ 10 分間以内に撮影された場合は、同一個体とみなし集計した（以下、「10 分補正」という。）。
- ・ オガサワラカワラヒワのカメラ日当たりの撮影頻度を算出した（月のカメラ稼働日数及び 10 分補正した撮影枚数から撮影枚数/100 カメラ日換算）。
- ・ 月単位の細かな増減ではなく、年単位の大きな増減傾向を把握するため、3 ヶ月の移動平均でグラフを作成し分析した。
- ・ 分析に使用した期間は表 1-1-1、カメラの設置台数と期間推移は表 1-1-2 の通り。
- ・ 天然水場、小型人工水場（平島のみ）、大型人工水場の設置条件ごとに分析した。

表 1-1-1 各カメラの分析期間

水場の形態	島名	分析期間
天然水場	向島、姉島、妹島、姪島	2016年6月～2025年10月
小型人工水場	平島	2021年5月～2025年10月
大型人工水場 (SIMカメラ含む)	向島、姉島、妹島、姪島、平島	2022年10月～2025年11月

表 1-1-2 カメラの設置台数・期間推移

島	設置時期	台数
向島	2017年5月～	4台
	2020年5月～	6台
	2021年5月～	6台+6台※1
	2022年5月～	9台
	2023年4月～	10台(大型人工水場1台)
	2024年4月～	4台+大型人工水場2台※2
	2024年9月～	4台+大型人工水場3台※2※3
姉島	2016年6月～	4台
	2020年5月～	6台
	2021年5月～	6台+6台※1
	2022年5月～	9台
	2023年4月～	10台(大型人工水場1台)
	2024年4月～	4台+大型人工水場2台※2
妹島	2016年6月～	4台
	2020年5月～	6台
	2021年5月～	6台+6台※1
	2022年5月～	9台
	2023年4月～	10台(大型人工水場1台)
	2024年4月～	4台+大型人工水場2台※2
姪島	2016年6月～	4台
	2020年5月～	6台
	2021年5月～	6台+6台※1
	2022年5月～	9台
	2023年4月～	10台(大型人工水場1台)
	2024年4月～	4台+大型人工水場2台※2
	2024年9月～	4台+大型人工水場4台※3
平島	2021年5月～	8台(小型人工水場)※1
	2022年1月～	6台(小型人工水場)※1
	2022年5月～	4台(小型人工水場)※1

	2023年4月～	4台（小型人工水場）+大型人工水場2台※2
--	----------	-----------------------

※1 Islands careの自主調査

※2 Islands careと林野庁の共同調査

※3 東京都発注調査

水場形態	設置状況	撮影状況	撮影状況(拡大)
天然			
大型人工 (Sim)			
小型人工			

写真1-1-1 各水場センサーカメラ設置状況とオガサワラカワラヒワの撮影状況

(2) カメラの稼働状況

各島の天然水場及び小型人工水場のカメラ台数を、2024年に9台から4台に変更したが、2025年も稼働状況に問題は発生しなかった(表1-1-3)。大型人工水場はカメラに不具合があり、姉島の稼働率が低下しているが、その他の島については稼働状況に問題は発生しなかった(表1-1-4)。なお、調査日数はカメラ台数に稼働期間(日数)を乗じて、稼働率は稼働日数を調査日数で除して算出した。

表1-1-3 2025年11月回収までのカメラ稼働状況(天然水場※平島は小型人工水場)

島	稼働期間	調査日数	稼働日数	稼働率
向島	2025年1月1日～2025年11月19日	1292	1214	94%
姉島	2025年1月1日～2025年11月18日	1288	1288	100%
妹島	2025年1月1日～2025年11月18日	1288	1218	95%
姪島	2025年1月1日～2025年11月18日	1288	994	77%
平島	2025年1月1日～2025年11月19日	1292	1173	91%
全島		6448	5887	91%

表 1-1-4 2025年11月回収までのカメラ稼働状況(大型人工水場)

島	稼働期間	調査日数	稼働日数	稼働率
向島	2025年1月1日～2025年11月30日	1002	974	97%
姉島	2025年1月1日～2025年11月30日	668	167	25%
妹島	2025年1月1日～2025年11月30日	668	619	93%
姪島	2025年1月1日～2025年11月30日	1336	1252	94%
平島	2025年1月1日～2025年11月30日	668	502	75%
全島		4342	3514	81%

(3) 撮影頻度の推移

1) 天然水場（向島、姉島、妹島、姪島）

調査を開始した2016年から2020年までは減少傾向が続いていたが、2021年以降は増加傾向が続いている（図1-1-2、図1-1-3）。この増加傾向は、2021年以降に実施された保全対策の効果によるものと考えられる。また、2024年の干ばつにより一度減少に転じたが、2025年は回復傾向が確認された（図1-1-3）。

2) 小型人工水場（平島）

2022年以降、撮影頻度が増加傾向にあったが、2025年は減少に転じている（図1-1-2）。一方で、平島では大型人工水場での撮影頻度が明瞭に増加しており、水が枯れやすい小型人工水場から水位が安定している大型人工水場にオガサワラカワラヒワが移行したのと考えられる（図1-1-5）。

3) 大型人工水場（向島、姉島、妹島、姪島、平島）

大型人工水場では、2024年と比較して2025年は向島、妹島、姪島、平島で撮影頻度の増加が確認された（図1-1-4）。平島は調査を開始した2022年以降増加傾向が継続している。姉島については、2025年の稼働率が低いため撮影頻度の変動を比較することが難しい。

なお、平島では、大型人工水場とそれに付随して設置された人工餌場にオガサワラカワラヒワが誘引されたため、小型人工水場での撮影頻度が減少した可能性がある（写真1-1-2）。

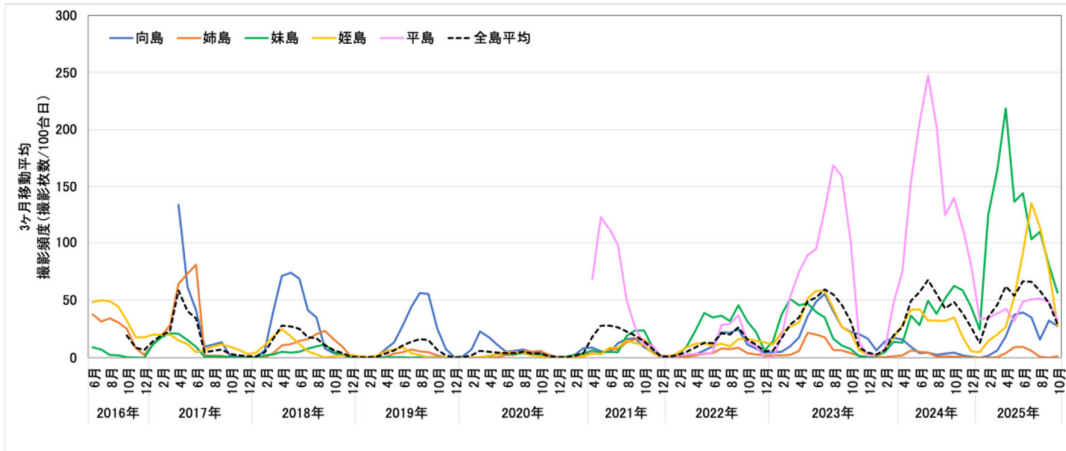


図1-1-2 島ごとの撮影頻度の推移（天然水場及び小型人工水場）

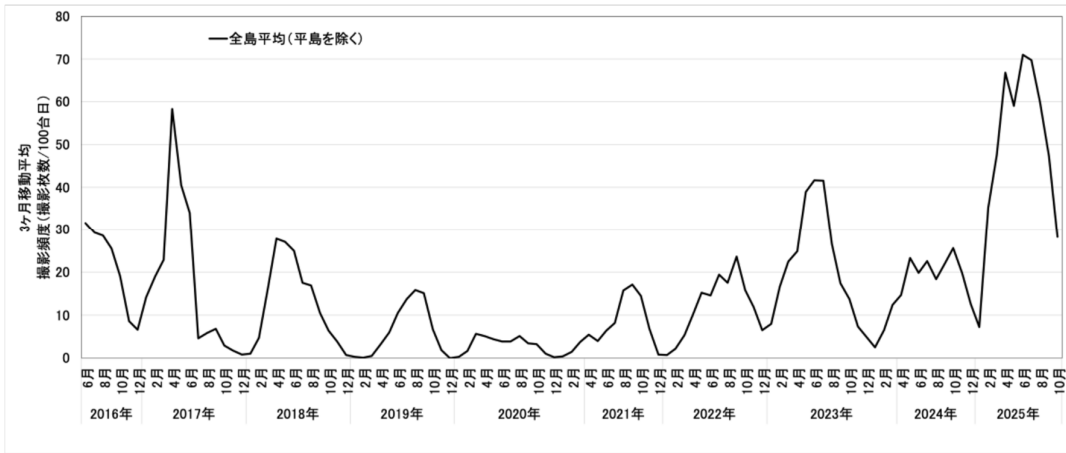


図1-1-3 平島を除く4島の月平均撮影頻度の推移（天然水場）

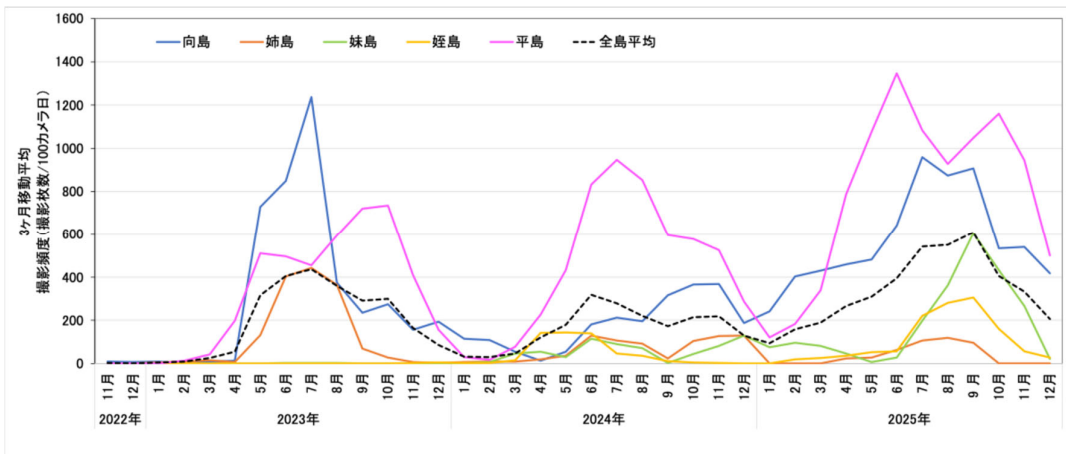


図1-1-4 島ごとの撮影頻度の推移（大型人工水場）



写真1-1-2 平島の大型人工水場と人工餌場の設置状況

1-2. センサス調査

(1) 調査方法

1) 調査期間

2025年5月10日～5月22日、7月4日～7月8日に実施した。

2) 調査場所

「1995、1996年の中村による母島属島の調査ルート（Nakamura 1997）」を参考に、向島、姉島、妹島、姪島、平島を広域に調査するためのルートを設定し調査を行った（図1-2-1）。

3) 分析方法

ルート上で、オガサワラカワラヒワを確認した場合は位置を記録し、観察個体数から1kmあたりの個体群密度を算出した。観察個体数は、観察場所や時間等から同個体と判断したものを除いた個体数とした。

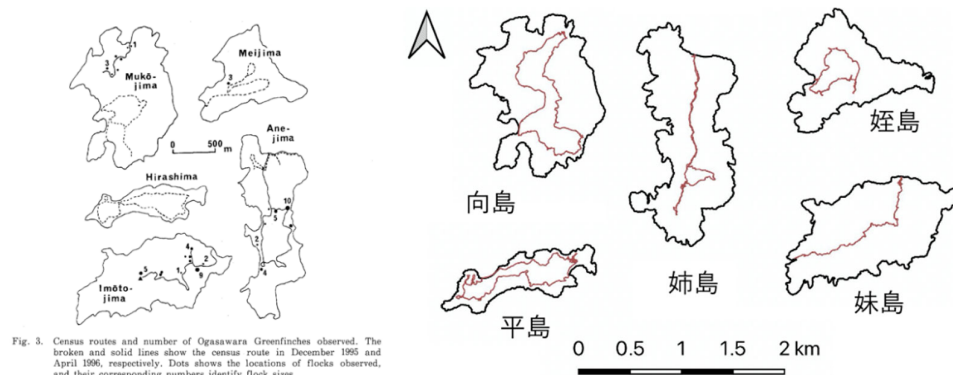


図 1-2-1 左：1995、1996 年の中村による母島属島の調査ルート（Nakamura 1997）
右：本調査のルート（参考ルート）

(2) 個体群密度の推移

1) 全島平均

2024年の干ばつの影響で減少に転じたが、2025年は4～5月、6～7月ともに個体群密度が回復傾向にあることが確認された（図1-2-2、図1-2-3）。また、調査を開始した2021年と比較すると、4～5月、6～7月ともに個体群密度が増加していることが確認された。4～5月の個体群密度は、調査を開始した2021年以降で最も高く、保全対策により繁殖個体数（成鳥数）が回復していることが窺われた。

2) 島ごと

2024年の干ばつの影響で減少に転じたが、姉島を除く島では回復傾向が確認された。ネズミ対策が実施された平島、向島、姪島で増加が見られたほか、妹島での増加が顕著であり、カメラ調査と同様の傾向が示された（図1-2-2、図1-2-3）。

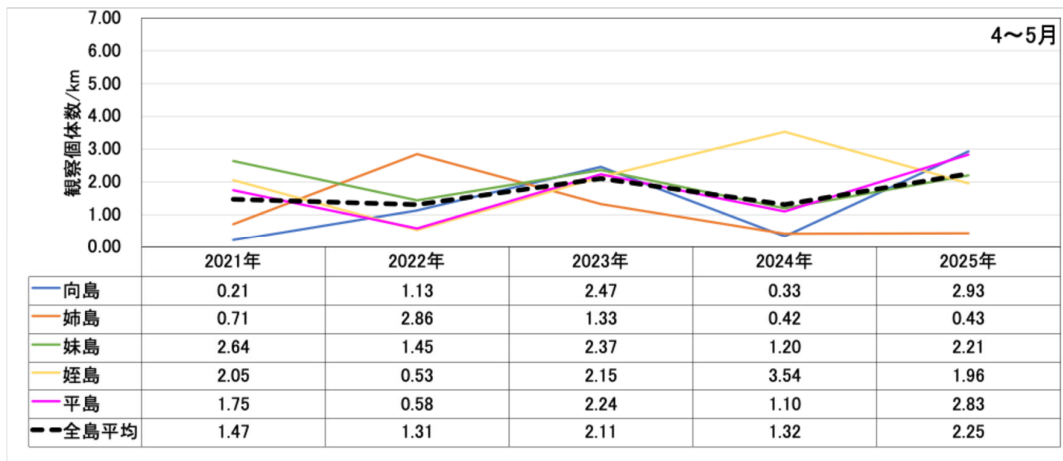


図1-2-2 2021～2025年の個体群密度の推移（4～5月）

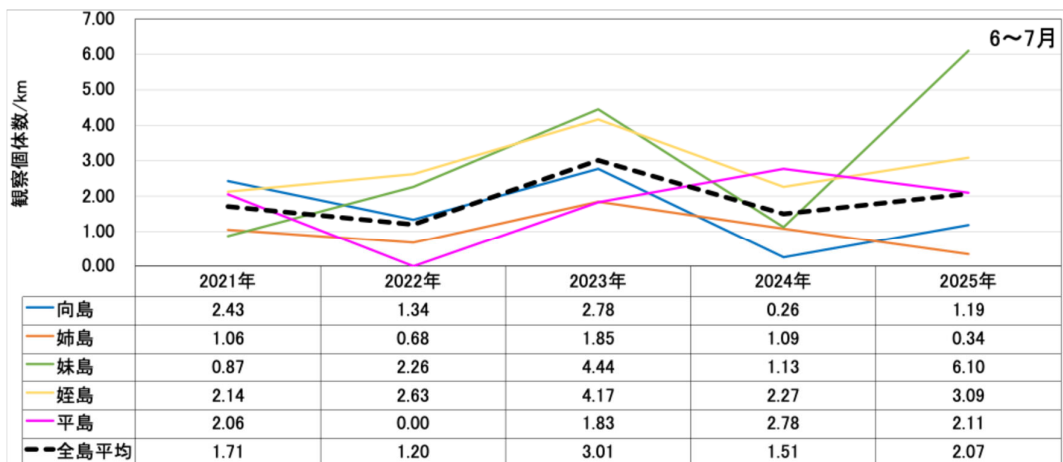


図1-2-3 2021～2025年の個体群密度の推移（6～7月）

1-3. 標識調査

(1) 調査方法

1) 調査期間

2025年7月4日～7月9日に実施した。

2) 調査場所及び調査日数

向島1日間、姉島1日間、妹島1日間、姪島1日間、平島2日間、計6日間実施した。

3) 調査方法

かすみ網により捕獲し、色足環標識及び読み取り式の色足環標識（以下、「PITタグ」という。）を装着した後に放鳥した。

4) 分析方法

- ・ 2011年以降の6月～8月の本事業のデータを使用（2020年のみ9月）。
- ・ 向島、姉島、妹島、姪島では2011年から、平島は2023年からのデータを使用。
- ・ 標識装着数と成鳥幼鳥別の割合は、齢不明は含まず、再捕獲個体を含む。
- ・ 標識装着数/日は、再捕獲個体を含まない。

(2) 標識装着数の推移

1) 向島、姉島、妹島、姪島（2011年～2025年）

- ・ 2025年の4島の標識装着数は6羽で、2024年の11羽と比較して大きく減少した(図1-3-1、図1-3-2)。特に姉島で標識装着数の減少が続いている。また、姉島、妹島、姪島では幼鳥の捕獲がなかった(図1-3-1)。ただし、カメラ調査、センサス調査では明瞭な個体群の増加傾向が確認されている島もあり、生息環境が改善された平島にオガサワラカワラヒワが移動している可能性が推測された。
- ・ 調査開始の2011年からの標識装着数の推移を見ると、2017年に大きく減少し、以降は標識装着数が横ばいであった。2023年には明瞭な増加が見られたが、2024年以降は減少傾向となっている(図1-3-2、図1-3-3)。

2) 平島（2023年～2025年）

- ・ 2025年の平島の標識装着数は合計42羽で、成鳥、幼鳥ともに全島で最も標識装着数が多かった。また、調査開始の2023年からは、顕著に増加している(図1-3-1、図1-3-4、図1-3-5)。なお、平島では捕獲地点付近に大型人工水場（2023年～）及び人工餌場（2024年～）が設置されているため、平島島内だけではなく他の島からもオガサワラカワラヒワが捕獲地点に誘引されていることについて留意する必要がある。

3) 全島（2023年～2025年）

- ・ 全島で調査を開始した2023年からの変動を見ると、2024年は干ばつの影響で減少に転じたが、2025年は回復傾向が確認された。また、2024年と比較すると2025年は幼鳥、成鳥ともに標識装着数が増加している(図1-3-6、図1-3-7)。

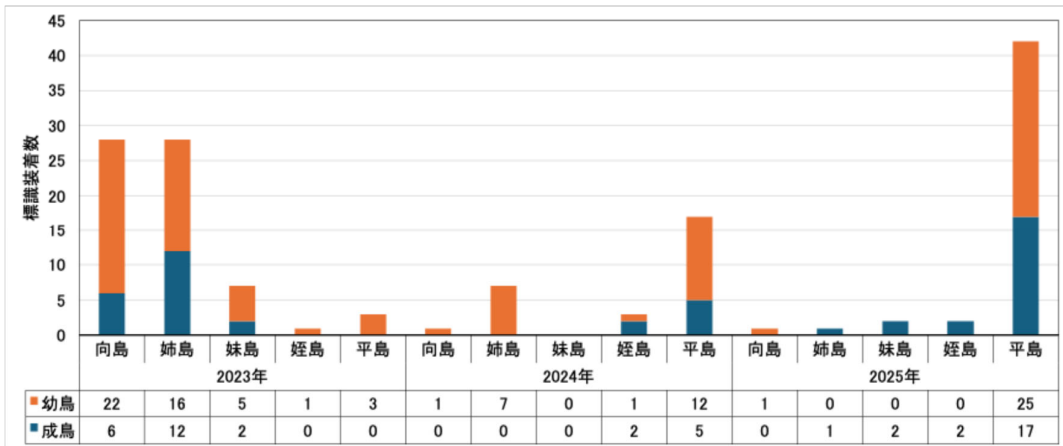


図1-3-1 島別の標識装着数（成鳥・幼鳥）

* 2023年は向島が2日間、2024年と2025年は平島が2日間、2023年～2025年は他の島は1日間実施。

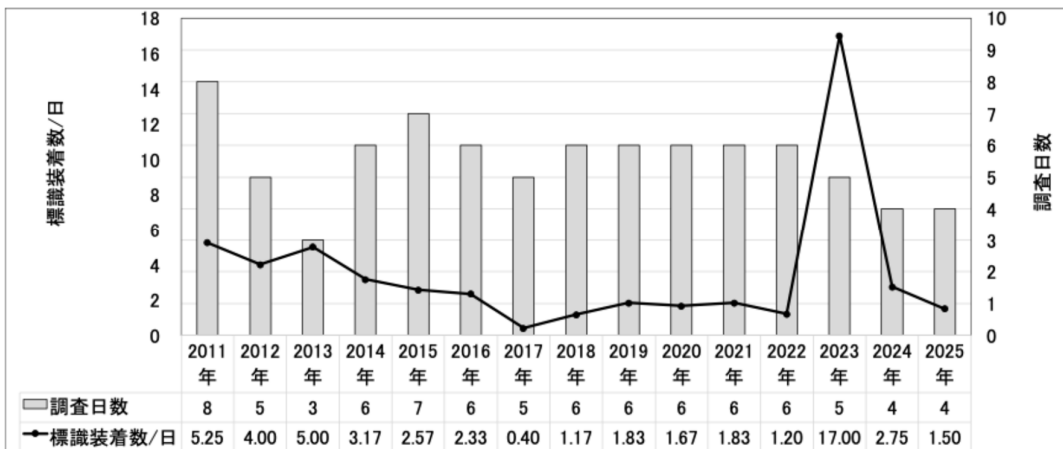


図1-3-2 向島、姉島、妹島、姪島の標識装着数/日（再捕獲含まず）

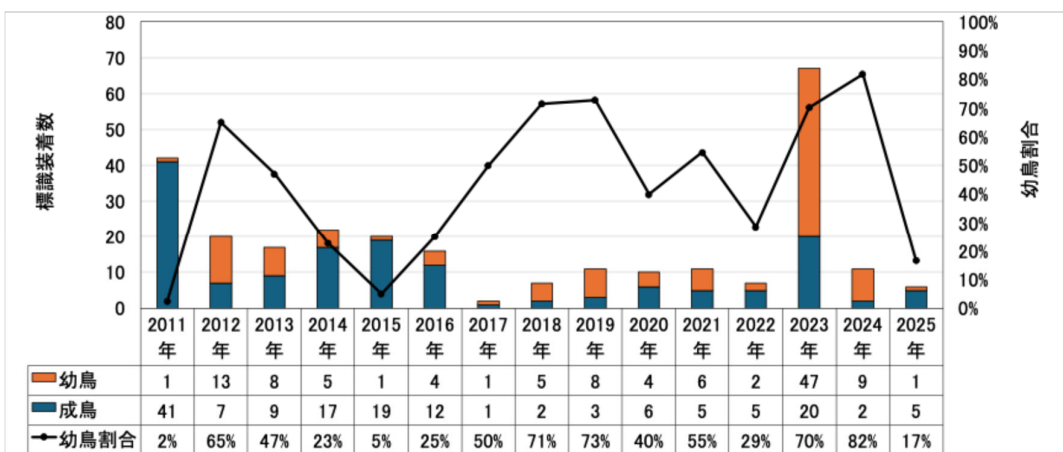


図1-3-3 向島、姉島、妹島、姪島の標識装着数と成鳥・幼鳥の割合

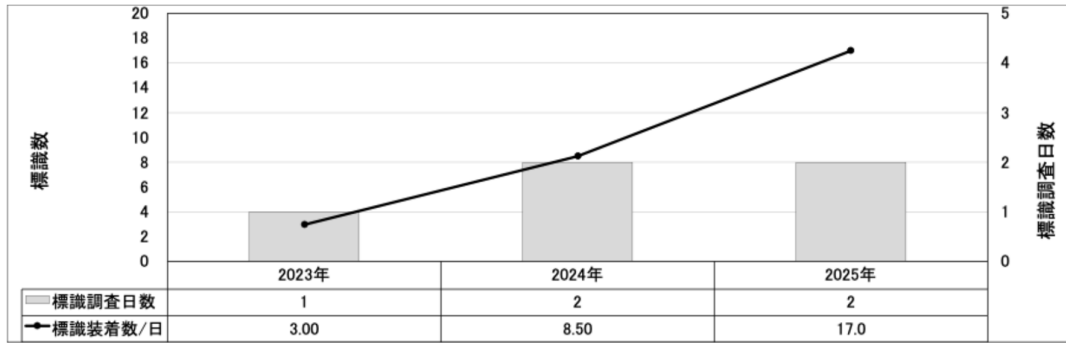


図1-3-4 平島の標識装着数/日（再捕獲含まず）

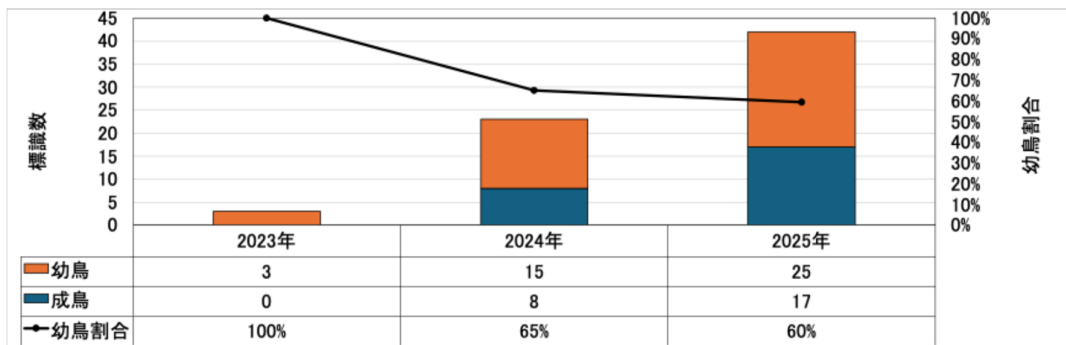


図1-3-5 平島の標識装着数と成鳥・幼鳥の割合

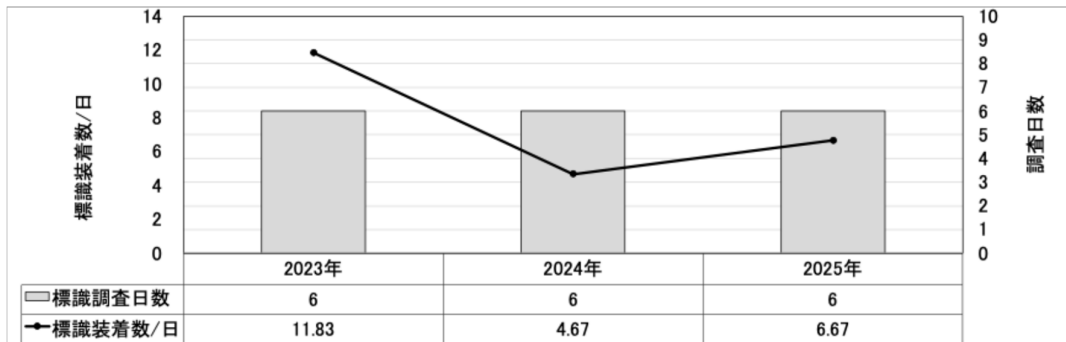


図1-3-6 全島の標識装着数/日（再捕獲含まず）

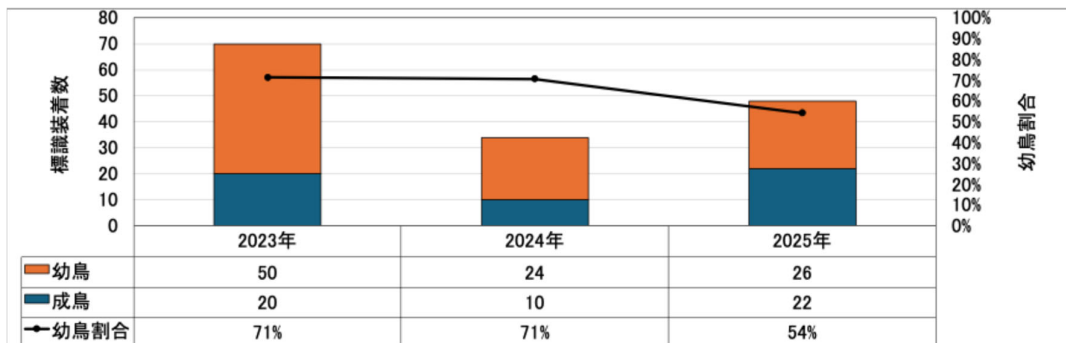


図1-3-7 全島の標識装着数と成鳥・幼鳥の割合

(3) 標識個体の観察状況

カメラ調査、センサス調査、標識調査等の際に観察された、足環標識個体の島間移動の記録を表1-3-1、表1-3-2に示した。平島、向島、姉島間で移動する個体が比較的多いこと、各島から平島へ移動する個体が多いこと、幼鳥が他の島に移動する傾向が高いことが窺われた。また、姪島から妹島に移動している個体が複数確認された。

表 1-3-1 足環標識個体の島間移動 (2023 年～2025 年)

放鳥地/観察地	平島	向島	姉島	妹島	姪島
平島		○	○		
向島	○		○		
姉島	○	○		○	
妹島			○		○
姪島	○			○	

* 2023 年：天然水場、小型人工水場、大型人工水場の 1～8 月までの撮影データを使用。

* 2024 年,2025 年：天然水場、小型人工水場の 8 月の撮影データを使用。

表 1-3-2 2025 年に観察された足環標識個体

捕獲年	捕獲月	捕獲時齢	足環色	放鳥地	観察地	観察日	実施者	調査手法
2024年	7	不明	O-	姪島	妹島	2025年8月	林野庁	カメラ
2025年	7	MA	S(PIT)-BPp	妹島	妹島	2025年10月	アイランズケア	目視
2024年	7	UJ	OM-PpB	姪島	妹島	2025年10月	アイランズケア	目視
不明	不明	不明	WM-	向島	平島	2025年8月	林野庁	カメラ
2023年	7	UJ	WM-YY	向島	平島	2025年8月	林野庁	カメラ
2025年	7	成鳥	Y(PIT)-B	姪島	平島	2025年8月	林野庁	カメラ
2023年	7	UJ	RM-BIY	姉島	平島	2025年4月	アイランズケア	目視
2023年	7	UJ	WM-YY	向島	平島	2025年4月	アイランズケア	目視
2023年	7	UJ	RM-BIY	姉島	平島	2025年5月	アイランズケア	目視
2023年	7	UJ	RM-BIY	姉島	平島	2025年10月	東京都	捕獲
2023年	7	UU	RM-YPp	姉島	平島	2025年10月	東京都	捕獲
2023年	7	UJ	WM-BIB	向島	平島	2025年10月	東京都	捕獲
2023年	7	UJ	WM-YY	向島	平島	2025年10月	東京都	捕獲
2023年	7	MJ	WM-BIP	向島	向島	2025年5月	林野庁	センサス
2023年	7	UJ	WM-BIO	向島	向島	2025年5月	林野庁	センサス
2025年	7	MA	Y(PIT)-BPp	姪島	姪島	2025年8月	林野庁	カメラ

* 2025 年は、以下の観察記録を使用。

カメラ調査：天然水場、小型人工水場の 8 月の撮影データ

センサス調査：通年の観察記録（林野庁、アイランズケア）

標識調査：7 月（林野庁）、10 月（東京都）の足環標識個体の記録

1-4. まとめ

(1) 生息状況

1) 成鳥

センサス及びカメラ調査において、4～5月の観察数や撮影頻度が増加していること、標識調査においても成鳥の捕獲数が増加していることから、繁殖個体数が回復傾向にある可能性が推測された。

2) 幼鳥

各調査の結果から、2025年の春繁殖は良好で、秋繁殖も一定数あったと推測された。

3) 島ごと

- ・ 向島、妹島、姪島、平島での増加が顕著であり、向島、姪島、平島についてはネズミ対策の効果と推測された。妹島の増加要因は、足環個体の観察記録から、姪島で増加した個体が妹島に飛来している可能性があるとして推測された。
- ・ 各調査において、平島での増加傾向が継続して確認された。平島では、2024年度から給餌を継続実施しており、給餌による保全効果が高いことが推測された。

4) 全島

- ・ 2021年以降、母島属島全体で増加傾向が確認されており、ネズミ対策等の保全策が広域に展開された効果が窺われた。

(2) 各調査の今後の改善点

1) カメラ調査

天然水場の水位は降雨量によって大きく変動し、オガサワラカワラヒワの撮影頻度に影響することが確認されている。そのため、水位が安定している大型人工水場にカメラを設置しモニタリング精度を向上させることが望ましい。

2) 標識調査

- ・ 標識による足の不具合が確認されたため、適切な足環への変更が必要である。
- ・ 2023年～2025年にかけては多くの個体に足環を装着しており、足環の装着数（色）も多く個体識別が可能である。そのため、過去のカメラデータを分析し、保全上重要なオガサワラカワラヒワの島間移動を把握する必要がある。

(3) 保全対策の評価

- ・ 各調査の結果から母島属島全体での増加傾向が確認された。人工水場及び人工餌場の設置のほか、ネズミ対策が広域に展開されたによる効果と考えられる。
- ・ 2024年は干ばつの影響により個体数が減少に転じたが、2025年は夏に干ばつが発生したにもかかわらず個体数の増加傾向が確認された。各島での保全対策の実施により、気象害の影響が緩和されたことが推測された。

(4) 短期目標の達成状況

推定繁殖個体数、保護増殖事業の2026年の短期目標を表1-4-1に示した。

2025年は、2024年の干ばつによる減少から回復してきていることが確認された。2023年以降では最も推定値が高く、保全対策の効果と推測された。一方で、これまでの調査から、気象害の発生により個体数が大きく減少することが確認されているため、引き続き生息域外保全を含めた、全ての保全策を加速させて実施することが必要と考えられる。

なお、推定繁殖個体数の上限値は、2026年の短期目標に達しているが、センサスによる密度指標は目標値の5割程度となっている。繁殖個体数の推定は、センサーカメラ調査のデータのみを使用していることから、センサス調査による密度指標も含めて複数の調査データを使用して評価していくことが望ましい。

表1-4-1 短期目標に対する推定個体数、密度指標の推移

年	推定繁殖個体数 (成鳥)	センサスによる 密度指標	備考
2011年	120～280 個体	4.1 羽/km*	干ばつ (春)
2020年	100 個体	1.5 羽/km	-
2021年	-	1.5 羽/km	-
2022年	-	1.3 羽/km	台風 (春)
2023年	123～139 個体	2.1 羽/km	-
2024年	59～79 個体	1.3 羽/km	干ばつ (春)
2025年	140～309 個体	2.3 羽/km	干ばつ (夏)
短期目標 2026年	300 個体	4.5 羽/km	-

* 推定繁殖個体数 (成鳥) : 8月のカメラ撮影記録を用いて、標識再捕獲法により推定。

* センサスによる密度指標 : 全島の4-5月のセンサス調査データ (全島平均値) を使用。

* 2011年のセンサスによる密度指標は、環境省「小笠原地域自然再生事業外来ほ乳類対策調査業務」によるポイントセンサス調査 (9月) のデータを使用。

表1-4-2 フェーズ別の目標数値（環境省オガサワラカワラヒワ保護増殖事業実施計画）

目標のフェーズ	数値目標 (母島列島個体群の繁殖個体数)	ラインセンサスによる基準※	数値目標の設定根拠	定性的指標
短期（令和4(2022)年度～令和8(2026)年度）	300 個体	4.5 羽/km	<ul style="list-style-type: none"> ・10年前（平成23(2011)年）の個体数（約120～280個体）を参考。 ・環境省レッドリストのランクCR判定基準Cの成熟個体数要件とおおよそ同等 	喫緊の絶滅危機からの脱却 緊急性の高い脅威を排除・低減し、繁殖個体数が上昇傾向となる。
長期（令和9(2027)年度～）	2,000 個体	30 羽/km	<ul style="list-style-type: none"> ・25年前（平成8(1996)年）の個体数（約1,000個体）を参考。 ・環境省レッドリストのランクEN判定基準Cの成熟個体数要件とおおよそ同等 	母島列島個体群の再生 生息環境を整備し長期に安定可能な個体数に戻す(5年以上個体数が増加または維持)。

※令和2(2020)年5月のラインセンサス結果（1.5羽/km）及び令和2(2020)年時点での推定個体数100羽から算出。

2. 提言事項

2-1. モニタリング調査結果から考えられる保全対策

(1) 妹島でのネズミ対策実施

姉島、妹島では、ネズミ対策が実施されていないが、妹島ではオガサワラカワラヒワの顕著な増加が確認された。一方で、姉島では他の島と比べて非常に低密度で推移していることが確認された。2025年だけのデータではあるが、両島の森林環境の違いが影響している可能性が考えられる。姉島はモクマオウ林の面積が多く多様性が低く、一方で妹島は天然の乾性低木林の面積が多く多様性が高い。両島ではネズミ対策が実施されておらず、オガサワラカワラヒワがネズミから受ける影響に差異はないが、森林の多様性が高く、餌資源量の条件が良好であった妹島で本種が増加した可能性が推測された。

平島、向島、姪島で実施されたネズミ対策により、オガサワラカワラヒワの増加が確認されており、これらの島で増加した個体群が妹島に集中すると、エコロジカルトラップになることが懸念される。そのため、今後、妹島でネズミ対策を実施することが重要と考えられる。

(2) モクマオウを含めた外来植物対策の検討

ネズミが生息している島では、ネズミの樹上利用が少なくオガサワラカワラヒワにとって安全な営巣場所となるモクマオウを安易に駆除できない状況である。一方で、森林の多様性がオガサワラカワラヒワの増加に重要であると考えられるため、ネズミ対策を実施した島を中心に、モクマオウを含めた外来植物の管理を検討する必要がある。

(3) 人工餌場の分散設置

人工餌場の設置による保全効果が確認されているが、現状では平島の1地点のみに設置され、オガサワラカワラヒワが他島から平島に集中していることが確認されている。一極集中による感染症の拡大、猛禽類等による捕食リスク等を軽減するため、ネズミの駆除が実施された向島、姪島においても給餌を実施し、リスク分散を図ることが望ましい。

人工餌場には、巣立ち後の幼鳥が多く飛来しており、春繁殖、秋繁殖の巣立ちに合わせて5月～11月頃まで実施することが望ましい。特に、春繁殖の巣立ち前の5月頃から巣立ち後の8月頃の期間が重要と考えられる。

2-2. その他の提言事項

足環標識の変更について

母島属島での調査において、足環を装着した足に不具合が発生した個体が複数観察された。生息域外保全における飼育個体でも同様の不具合が確認されており、足環の内径、高さ等が影響している可能性が窺われたため、緊急対応として以降の足環装着の要件を以下の通り設定した。

【緊急対応策】

- ・ 足環の内径 2.8mm 以上とする。
- ・ 足環の高さはできる限り低くする。
- ・ 片足に1個までとする。
- ・ 足環標識個体が捕獲された場合には、足環を外して上記の足環に変更する。

また、適切な足環の選定は、生息域内の足環個体の追跡に限界があることから、生息域外保全と密に連携し、検討することが重要である。なお、生息域外で飼育された個体を生息域内に放鳥することを踏まえると、PIT タグ足環の影響緩和策の試行も検討することが望ましい。

3.参考文献

- ・環境省 オガサワラカワラヒワ保護増殖事業実施計画
- ・鈴木 創 (2022) 気象災害グループセッション報告. 小笠原研究 48: 161-172.
- ・堀越 和夫 (2026) 第2回オガサワラカワラヒワ保全計画づくりワークショップ気象災害グループセッション報告. 小笠原研究 52: 印刷中.
- ・Nakamura H. 1997. Ecological adaptations of the Oriental Greenfinch *Carduelis sinica* on the Ogasawara Islands. Japanese Journal of Ornithology:46 95–110.

* 「令和7年度小笠原諸島希少鳥類保護管理対策調査」以外で、一般社団法人Islands careが実施した調査は、公益財団法人東京動物園協会「野生生物保全基金」等の支援を受けて実施したものである。